



公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です

〒104-0061 東京都中央区銀座7-16-12 G-7ビルディング9階  
☎ 03-3541-4771 FAX 03-3541-4783 <https://www.jcancer.jp/>

主な内容

- 1～5面 2019年度がん征圧全国大会
- 6面 ピンクリボンセミナー
- 8面 2019年度RFL「プロジェクト未来」研究助成決定

## 2019年度がん征圧全国大会 松山市で開催 約1300人ががん征圧への思いを新たに

2019年度がん征圧全国大会が9月13日、愛媛県松山市の松山市市民会館大ホールで開かれた。同大会は今年で52回目。「がん征圧 愛媛ではぐくむ 心と体」をテーマに全国のグループ支部関係者をはじめ、愛媛県の医療機関関係者、学生、患者団体関係者ら約1300人が参加し、がん征圧への思いを新たにしました。

主催者を代表して久野梧郎・愛媛県総合保健協会理事長が「がん征圧にはがんについて正しく知ると共に、がん検診による早期発見・治療で多くのがんが治せることを国民に知ってもらうことが何よりも大切。大会を機に検診の大切さを再認識し、がん征圧の輪を全国に広げてもらいたい」と開会の言葉を述べた。続いて日本対がん協会の垣添忠生会長が「日本対がん協会は昨年60周年を迎えたが、この間、がんの状況は大きく変わった。以前はがんを治すことにすべてを集中していたが、最近は治し、支えることにパラダイムシフトしてきた。協会は、がんの予防・検診の普及、患者・家族の支援、がんの正しい知識の普及・啓発の三つの活動を実現することで、がんで苦しみ、悲しむ人をなくすことを目指して



全国大会であいさつする垣添会長

いる。国と連携しながら、がんの患者・家族、サバイバーの支援に一層努力していきます」とあいさつした。

表彰に移り、今年度の日本対がん協会賞「個人の部」に選ばれた福島県郡山市の慈山会医学研究所付属坪井病院名誉院長の岩波洋氏(74)、山形市の大泉胃腸科内科クリニック院長の大泉晴史氏(71)、愛媛県総合保健協会副理事長の仙波匡彬氏(75)、仙台市の杜の都産業保健会一番町健診クリニックの矢嶋聰氏(82)の4氏と、「団体の部」に選ばれた新潟市医師会(藤田一隆会長)に、垣添会長から表彰状が贈られた。

第19回朝日がん大賞に決まった国立がん研究センターがん対策情報センター(若尾文彦センター長)には、朝日新聞社の渡辺雅隆代表取締役社長から表彰状と副賞100万円が贈呈された。受賞団体を代表して若尾センター長は

「今、世の中にはがんに関する間違った情報があふれていて、正しい医療につながらない人もまだまだ多い。今回の受賞を機に、より多くの人に私たちのがん情報サービスやがん相談支援センターのことを知ってもらい、正しい情報に結びついてもらえるとうれしい」と受賞の喜びを語った。

今年度のがん征圧スローガン「がん検診 あなたを守る 新習慣」の作者である山梨県健康管理事業団の小林秀樹さん、全国のグループ支部職員の永年勤続者55人を代表して愛媛県総合保健協会の宇都宮親美さんに、垣添会長から表彰状が贈られた。

続いて記念講演として作家・作詩家のなかにし礼さんが「ポジティブに、自分を活性化して向き合おう～がんは成長のチャンス～」と題し、食道がんを患った自らの体験を語り、がんになってもまな板の鯉にならず、自分で調べ、自分で選ぶことの重要性和、がんになって成長できたことを強調した。

愛媛県でのがん征圧全国大会開催は40年ぶり2回目。主催は日本対がん協会と愛媛県総合保健協会が朝日新聞社が特別後援した。来年度は宮崎市で開催される。(2～5面に関連記事)

**がん相談ホットライン** 祝日・年末年始を除く毎日  
03-3541-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3541-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

**医師による面接・電話相談(要予約)**  
**社労士による就労相談(要予約)**  
予約専用 03-3541-7835

日本対がん協会は医師による面接・電話相談と社労士による就労の電話相談(ともに無料、電話代は別)を受け付けています。予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までです。医師による相談は電話が1人20分、面接は30分、社労士による電話相談は40分になります。詳しくはホームページ(<https://www.jcancer.jp/>)をご覧ください。

# がん征圧全国大会記念シンポジウム

## 血液検査でがんを診断する研究の動向を議論



シンポジウムの討論

2019年度のがん征圧全国大会記念シンポジウムが大会前日の9月12日、松山市のANAクラウンプラザホテル松山で開催された(主催：日本対がん協会、愛媛県総合保健協会)。

今年のテーマは「血液検査でがんを見分ける～変貌するがん検診の将来」。血液などの体液のサンプルを使ってがんを診断する技術の研究が進んでおり、実用化されると、現在のがん検診が大きく変わる可能性があるだけに関心が高まっている。日本対がん協会も研究グループに加わり、血液検査で膵がんの早期発見を目指す研究を進めている本田一文・国立がん研究センター研究所早期診断バイオマーカー開発部門部門長、血液で13種類のがんの早期診断を目指す研究を進めている落谷孝広・東京医科大学医学総合研究所分子細胞治療研究部門教授、江浪武志・厚生労働省がん・疾病対策課長を講師に招き、研究の現状や検診の将来について講演と討論を行った。

### 膵がんの早期発見目指す 血液バイオマーカー

はじめに本田部門長が「膵がん早期発見を目指す 新規血液バイオマーカー-apoA 2-isoforms」と題して講演し

た。膵がんが、罹患した人の多くが亡くなってしまう難治がんであり、見つかったときは手術ができないIV期になっていることを指摘。そのため、早期の診断法の開発が必須として、血液検査によって早期の膵がんや膵がんの高リスク群を絞り込む検診プログラムの開発に取り組んでいることを説明した。

本田部門長は、膵がん患者と健康者の血液中のたんぱく質の分析をしている中で、患者の血液中のapoA 2-isoformsというたんぱく質の特徴的な変化を発見し、検査キットを開発した。神戸大学などとの研究で膵臓の血液バイオマーカーとして有望なデータが得られたことから、2017年から日本対がん協会の協力を得て、北海道、神戸市、鹿児島県で健診やがん検診を受けた50歳以上の男女を対象に日本医療研究開発機構(AMED)の研究費による臨床研究を始めたことを解説した。

血液検査で異常値が出た人はダイナミックCTによる精密検査を受けても

らう形で、登録者が1万5千人を超え、「(登録者の中から)膵がんになる人がどのくらい出てくるのかがわかれば、検診としての感度や特異度、有病率もみえてくる」と期待を寄せた。早期診断バイオマーカーとして、医薬品医療機器総合機構(PMDA)に对外診断薬承認を早期に受けるための準備を進めていることなど、現状を紹介した。



本田部門長

らう形で、登録者が1万5千人を超え、「(登録者の中から)膵がんになる人がどのくらい出てくるのかがわかれば、検診としての感度や特異度、有病率もみえてくる」と期待を寄せた。早期診断バイオマーカーとして、医薬品医療機器総合機構(PMDA)に对外診断薬承認を早期に受けるための準備を進めていることなど、現状を紹介した。

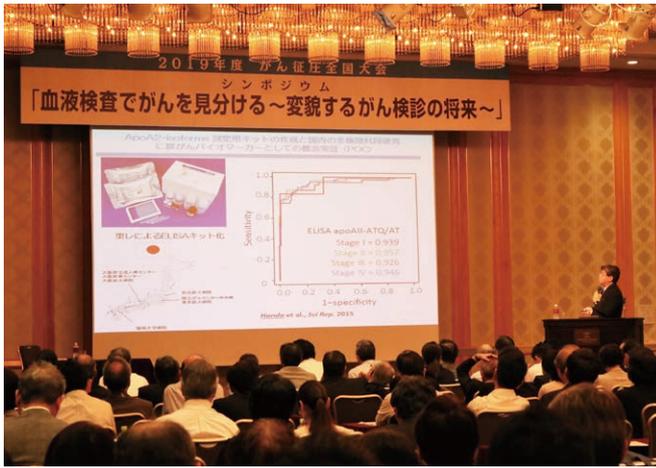
### 血液1滴で 13種類のがん診断へ

東京医科大の落谷教授は、「血液検査で13種類のがんを見つけるマイクロRNA(miRNA)技術開発の現状」をテーマに、国立がん研究センター研究所で進めてきたmiRNA研究について解説した。

落谷教授は、がん細胞から分泌されたmiRNAという物質がエクソソームという小胞体に包まれて血液中に安定して含まれていることを利用して、miRNAの種類からがん細胞の様々な情報を見極める研究を進めて



落谷教授



講演する本田部門長

おり、14年から19年3月まで、血液1滴から、乳がんや大腸がんなど13種類のがんを早期発見する研究開発プロジェクトを実施してきた。

国立がん研究センターに保管されていたがん患者の血液や健常者の血液を分析し、それぞれのがんに特有に変化するmiRNAを見つけてきた。その結果、乳がんでは97%の感度で見つけるなど、数種類のmiRNAの組み合わせでがん患者と健常者を見分けられるようになったことを紹介した。

こうしたことから今後、体外診断薬としての承認を目指し、日本対がん協会グループ支部や人間ドックの実施機関などと協力してがん検診受診者を対象に、血液中のmiRNAマーカー検査を実施して、早期のがん発見の性能をきちんと評価していきたい考えを示した。

その後は、厚労省の江浪課長が、「我が国のがん検診 新たな手法の開発と導入」と題して講演した。国が推奨する5つのがん検診の状況や、国が推奨する対策型検診とするには、死亡率減少効果の確認などの基本条件があることを説明。血液検査に関する2人の講演を受けて、「既存のがん検診にとっ

て代わるというより、新手法を組み合わせることでより確実にがんを見つけ、また侵襲性も少なくしていく方法の提案と受け止めた。現場で受け止めていく体制整備について今後議論していかないといけない」と語った。

### 新手法を どう評価していくか議論

講演後の討論では、各発表者への会場からの質問に補足解説する形で議論が深められた。

会場からは、こうした新手法が導入されたときの過剰診断につながる可能性への質問が出た。これに対し、落谷教授はmiRNA検査では、画像で診断できる最小のがんを見つけるものであるとして、それほど過剰診断にはつながらないのではないか、と答え、本当の意味で悪性になるものとそうでないものも恐らく判断できるのではないかと、その見方を示した。

また、本田部門長は、「膀胱がんのように非常に予後の悪いがんでは、過剰診断になってもやらなければならないのではないか」との考えを示した。

また、こうした新しい手法への日本対がん協会グループ支部の協力の仕方についての質問も出た。これに対して、落谷教授は、miRNA検査が体外診断薬



講演する落谷教授

として承認が下りたら、どう連携していくか相談したい旨を示した。また、「体外診断薬としての承認を得ることが大事で非常に重い」として、承認がされていないのにmiRNAでの診断を勝手に実施している診療所があることを指摘し、そうしたことを研究者、行政、協会関係者らが監視しながらこの診断法を育てていく必要性を訴えた。

また、対策型検診の手法として認められるには現状では、死亡率減少効果を確かめなければならないが、それに長い期間が必要となる。このため、こうした新手法をどう評価していくかも議論になった。

落谷教授は、「13種類のがんを血液から見つける方法が体外診断薬として出ようとしているときに、死亡率減少効果の検証はだれがどこでやるのが大事。企業がやるのはなかなか難しい」との見方を示し、協会グループ支部の支援を期待した。

本田部門長は、「膀胱がんのように発生頻度は低いが、死亡率が高いがんでは、実際の検診現場に(新手法を)世に出してリアルワールドのデータをまとめ、死亡率減少の効果と代替していくのかどうかを考えないといけない時期に来ているのではないかと問いかけた。

江浪課長は、今回のような新しい手法が従来の検診と組み合わせられて実施されるようになったときは、その解釈や意義を、国がどう情報発信するのか議論しないといけないと語った。(シンポジウムの詳細は12月に発行を予定している対がん協会報増刊号で紹介).



江浪課長



討論する3人

# がん征圧全国大会記念がん検診セミナー

## 子宮頸がん、乳がん検診や検診受診率など3テーマで開催

2019年度のがん征圧全国大会の前日行事として9月12日、松山市のANAクラウンプラザホテル松山で全国大会記念がん検診セミナーが開催された(主催：日本対がん協会、愛媛県総合保健協会)。

がん検診セミナーは、3部構成で行われた。第1部で黒川哲司・福井大学医学部准教授(産婦人科)が「子宮がんで悲しむ人をなくすために」をテーマに、第2部で最上博・愛媛県総合保健協会診療所副所長が「要精検率2%の背景～乳がん検診の精度管理の一考察」をテーマに講演。第3部では「低迷する受診率アップへの挑戦」をテーマに、福吉潤・キャンサーズキャン社長と呉田貴志・愛媛県総合保健協会総務部副部長兼経営企画部副部長がそれぞれ講演した。



セミナーの様子

### 自己採取HPV検査は 受診率向上へ

第1部で黒川准教授は、子宮頸がんは日本では年齢調整罹患率では、米国に比べても2倍以上高いことや、患者の若年化が進んでいること



黒川准教授

を示し、子宮頸がん検診による若年者の死亡率減少と前がん病変での早期発見の効果を説明した。

子宮頸がん検診の方法で、日本では細胞診を行っている市町村がほとんどで、ヒトパピローマウイルスを検出するHPV検査は導入されていないが、福井県で、細胞診と、HPV検査と細胞診併用の効果を比べる臨床研究を進めていることを紹介。細胞診での前がん病変以上の検出感度が70%なのに対し、併用法では100%となっている途中経過を示し、特異度の課題を挙げたうえで、導入への期待を語った。

また、子宮頸がん検診の問題点の一つに若年者の受診率の低さがあることを指摘し、その解決法として、自宅で

検体を採取できる自己採取HPV検査の導入に取り組んでいることを紹介した。自己採取と医師の採取を比較すると、かなりの割合で一致し、自己採取だけで陽性になる場合があることも示し、自己採取で陽性になった人が検診を受けるようになれば受診率の向上につながるとして、自己採取HPV検査が受診率向上のツールとなることを強調した。

### 比較読影で要精検率減少へ

第2部で最上副所長は、愛媛県総合保健協会の乳がん検診の歩みについてふれ、2009年からマンモグラフィ検査の比較読影ができるように



最上副所長

なり、10年からは画像がデジタル化がされた経緯を紹介。同協会の乳がん検診の要精検率が08年には7.4%だったのが、09年から4.2%に減り、14年には3%を割り、15年以降は1%台後半となっていることを示し、そうした低い要精検率が続いている背景を語

った。

最上副所長は、前年、さらにその前年のマンモグラフィ画像を検査機関内部での比較読影によって判定することで、自信を持って石灰化などの判定ができるようになったとして、比較読影が要精検率を明らかに下げるファクターであることを強調した。

### 受診率向上への新手法を紹介

第3部ではまず福吉社長が「受診率向上の新手法」として、人の心理特性を利用して望ましい行動に誘導する「ナッジ」と呼ばれる行動変容の



福吉社長

手法を検診の受診勧奨などに活用することを紹介。受診勧奨のチラシで、受診すると得をするのではなく、損をするイメージを与えるメッセージに変えたことで受診率を上げられた例を示した。さらに受診率を向上させるためには、初めて検診を受診した人がリピートする率を高めることが重要として、そのため、受診者目線で検診のサービ

スを考えていくことを強調した。

一方、呉田副部長は、キャンサースクアンと業務提携して県内の16市町で進めてきている受診勧奨プロジェクトについて説明した。18年度に



呉田副部長

特定健診の受診者が増えたことから、特定健診の予約受付時にがん検診の予約への誘導もウェブで一元的にできるシステムを日立製作所と共同開発していることを語った。特定健診の受診者のがん検診に誘導するだけでなく、利用者の利便性を高めることが目的で、詳細は、同日愛媛県総合保健協会が同会場で開いたスイーツセミナーでも展

示紹介された。

セミナーでは最後に、参加していた江浪武志・厚生労働省がん疾病・対策課長が「行政として取り組んでいくこととして、検診の受診率を高めるにはどんな手法が効果的なのかエビデンスを集め、その好事例を紹介していくことが大事」とコメントした。

# がんは成長のチャンス

作家・作詩家のなかにし礼氏は「ポジティブに、自分を活性化して向き合おう～がんは成長のチャンス～」と題して、がん征圧全国大会の記念講演を行い、がん発見から今に至るまでの心境やがんに向き合う思いを語った。

2012年に食道がんになったとき、手術を急ぐ医師の対応を嫌って、「自分で判断したい」と次々と別の医師に当たり、5人目の医師のもとで陽子線治療に行きあたった経緯を紹介。じたばたもがいて陽子線治療に行きつき、がんをなくすことができたことから、「がんになったからといって医師任せにせず、まな板の鯉にならず、自分で調べ、自分で判断すれば、新しい自分を発見できる」と強調した。

その後、2015年にリンパ節に再発した時は手術で患部を切除でき

ず、がん細胞を圧迫していると思われる静脈だけを切り、手術を終えたが、その後5回の抗がん剤治療を行うと、がんをなくすことができたことを紹介。抗がん剤の治療中は体力が低下し、元気がなくなったが、「首からは抗がん剤と闘うが、首からは妄想もできるし、普通なので、活用しないといけない」と思うようにして、小説を書き始め、治療を乗り切った経緯を語った。

さらにがんになったことで自分と向き合う時間が長くなり、自分が優しくなるなど成長し、活動も活発になったことを紹介。その後、面識もなかった歌手の矢沢永吉さんから新曲の作詩の依頼を受けるなど、どんどん忙しくなっていることも明かした。

## なかにし礼氏

### 全国大会記念講演

「がんになったとき、がんである自分を友だちとして仲良くし、首から上を働かせて活動しなといけない。がんと闘うことは、がんを楽しむこと。そうすることが生きることで世の中の方が、自分にとっていい方になっていった。がんになってまな板の鯉にならず、じたばたしろ」と、ポジティブな気持ちを持ちづけることの大切さを訴えた。



講演するなかにし礼氏

## 愛媛県立医療技術大学の学生が

# 愛媛県アピール

2019年度のがん征圧全国大会では、愛媛県立医療技術大学の学生が、「私たち自身のためにもぜひがん検診に行きましょう」との愛媛県アピールを発表して、大会をしめくくった。

学生たちは、自らも活動に加わっている「リレー・フォー・ライフ・ジャパ

ン・えひめ」の活動も紹介した上で、愛媛県イメージキャラクターの「みきゃん」と「ダークみきゃん」とともに愛媛県のがん検診の受診率に関するクイズを展開。同県のがん検診受診率が全国的に



も高くない現状を示し、がん検診受診をうながす愛媛県アピールにつながっていた。

## ピンクリボンセミナーを開催 20～30代の女性向けに乳がんの正しい知識を

ピンクリボンフェスティバル運営委員会(日本対がん協会、朝日新聞社ほかで構成)は9月14日、横浜市西区みなとみらいのクイーンズスクエア横浜クイーンズサークルで20～30代女性のためのピンクリボンオープンセミナー「外見も内面も輝いている私へ♡自分を知って“素敵なカラダ”を作ろう」を開催した。著名人が乳がんになるなどして、若い女性にも不安になる人が多いことから、20～30代向けに乳がんについての正しい知識を知ってもらおうと企画されたもので、84人が参加した。会場がオープンスペースのため、大勢の立ち見客も集まった。

セミナーでは、昭和大学医学部乳腺外科講師の増田紘子さんが講師となって、ゲストの元女子サッカー日本代表でタレントの丸山桂里奈さんの質問を受けるなどしながら、若い女性向けに知っておいてもらいたい乳がんや乳がん検診などに関する知識についてわかりやすく解説した。

増田さんは、女性にとって最もなりやすいのが乳がんだが、死亡率では1位が大腸がんで、乳がんは5位であることを示し、乳がんは多いけれど、きちんと治療すれば治る可能性が十分あ

るがんであることを強調した。また、「若い人で多いのは血液のがんで、乳がんが一番多くなるのは40代からで、40代後半が好発年齢」として、20代では乳がんより子宮頸がんの方がなる確率が高いことを説明した。

一方、乳がん検診のマンモグラフィ検査が推奨されているのは40歳からで、30代では検出しにくい検査であることを示し、若い人には乳がんという病気があることは意識してもらいたい、若い人ではそれほど罹患率は高くないがんであることを指摘した。ただ、家族の中で乳がんになった人がいる場合は、がんになるリスクが高くなることや、BRCA1やBRCA2という遺伝子の異常による家族性の乳がんも5～10%あることを紹介。家族性の乳がんが若い時にがんになる原因の一つであり、そうしたときの検査法では超音波検査があることなどを解説した。

### セルフチェックの仕方も解説

増田さんは、若い人では自分の胸の



丸山さん(右)と、乳がんについて解説する増田さん(中央)

状態を把握しておくことが大切として、セルフチェックの大切さも解説。丸山さんからチェックの仕方を質問され、腕を上げて胸をさわったときに、若い人は乳腺組織が硬いため、乳腺組織をしこりと間違えてしまいがちなことを説明。触って簡単に動くのは乳腺組織であると紹介し、1か月に1回はチェックすることを勧めていた。

また、タバコは吸わず、受動喫煙を避け、お酒もほどほどにし、バランスよく食事をとり、しっかり運動をすること、授乳もしっかりするなどの予防法も紹介した。

最後に「乳がんは治る方が確実に多いがんで、しっかり治療すればしっかり社会生活に戻れるがんであることを覚えてほしい」と締めくくった。

## 中川東小学校



授業する望月参事

東京都足立区の中川東小学校で9月20日、日本対がん協会の協力でタバコの害についての出張授業が行われた。講師は、禁煙教育に長く取り組んできた日本対がん協会の望月友美子参

## 望月参事が

事で、6年生の4クラスの児童約120人を対象に、タバコの害やがん予防についてわかりやすく解説した。

望月参事は、タバコを200種以上の有害物質が含まれている「毒の缶詰」であると表現。タバコを水に浸した茶色の「タバコ水」にア

サガオを入れると枯れてしまうことやミミズも死んでしまうことも示しながら、タバコを吸うことで、その毒が肺から血液に入っていく、全身に広がっていくことで、全身の細胞を傷つけ、

## 出張授業

様々ながんや脳卒中などを引き起こす全身病であることを説明した。

また、タバコは、人が吸っているのをみて真似して吸い始める人が多く、そこから吸う人が広がっていくことから、タバコも感染症と同じと比喻し、子どもたちをタバコから守るワクチンとなるのが、タバコの害について自分で判断する知恵を得ることであることを解説した。

さらに「がん予防の初めの一步はタバコから」として、「タバコを吸うのをやめた人がいたらほめてあげて」と。子どもたちに語りかけていた。

## ボートレース桐生でピンクリボン活動 山田邦子さんのトークショーやセミナー開催



トークショーで語る原元さん(左)、山田さん(中)、稲垣さん(右)

日本対がん協会は9月22日、群馬県みどり市のボートレース桐生で開催された市民向けイベント「ドラキリュウファミリーフェス」(みどり市ほか主催)でピンクリボン活動を実施した。好天に恵まれ、イベント開始から1時間ほどで、約3千人が来場するなど家族連れでにぎわった。

実施されたタレントの山田邦子さんによるピンクリボントークショーでは山田さんが自らの乳がんの経験を、ユーモアを交えながら語り、詰めかけた大勢の市民が聴き入っていた。

トークショーに続いて乳腺専門医の稲垣麻美・いながき乳腺クリニック院長を講師に、大腸がん経験者でフリー

アナウンサーの原元美紀さんの司会によるセミナーも実施。稲垣さんは「乳がんは予防することはできないが、早期発見と早期治療が重要な病気」「がん検診を定期的に受けることが、がんの早期発見の第一歩」などと、わかりやすく説明した。

この日は、日本対がん協会のほか、群馬県支部の群馬県健康づくり財団が啓発ブースを出展し、事前申し込み制でマンモグラフィ検診車による乳がんの無料検診も行われた。

この日は、日本対がん協会のほか、群馬県支部の群馬県健康づくり財団が啓発ブースを出展し、事前申し込み制でマンモグラフィ検診車による乳がんの無料検診も行われた。



### 厚労省調査

## 子宮頸がんワクチン

# 「わからないことが多い」と約4割が接種ためらう

厚生労働省は8月30日、子宮頸がんの原因となるヒトパピローマウイルス(HPV)の感染を予防するHPVワクチンの認知度に関して実施した調査結果を発表した。HPVワクチンの接種については、「わからないことが多いため、決めかねている」と約4割が答えていることがわかった。

HPVワクチンは2013年4月から小学6年から高校1年の女子を対象とした定期接種が始まったが、接種後に長期的な痛みやしびれを訴える声が相次ぎ、同年6月から国は積極的な接種の勧奨を中止している。そうした中、厚

労省は、HPVワクチンに関する情報がどの程度浸透、理解されているかを調べるため、昨年10月、全国の12~69歳の男女2400人にインターネットで調査した。このうち12~16歳は母親が横にいる状態で回答してもらった。

その結果、「HPVワクチンの意義・効果を知っているのか」の問いについては、「知っている」が18.8%、「少し知っている」が22.5%で、合わせて約4割だった。また、HPVワクチン接種後に起こりえる症状について、「知っている」が10.3%、「少し知っている」が21.2%で、合わせて約3割だった。

これに対し、HPVワクチンの接種については、「わからないことが多いため、決めかねている」が41.3%、「わからない」が17%を占め、情報不足がうかがわれた。

一方で、「接種したいと思っているが、まだ接種していない」が17.4%、「今は接種したいと思っていないが、今後検討したい」が11.9%、「接種したいと思っておらず、今後も接種の予定はない」が8.5%で、「すでに接種した」は2.8%だった。

訂正とお詫び 対がん協会報9月号5面に掲載した「よくわかる!がんの授業 字幕手話版を作成」の記事の中で「社会福祉法人聴覚障害者情報文化センター」となっていたのは「社会福祉法人聴力障害者情報文化センター」の間違いでした。訂正してお詫び申し上げます。

## 古本で日本対がん協会に寄付ができます

読み終えた本やDVDなどを活用しませんか?

詳しくは「チャリボン」 <https://www.charibon.jp/partner/JCS/>  
(ISBNのバーコードがついた書籍類が対象です)

charibon by VALLE BOOKS

お問合せ(株式会社バリューブックス): 0120-826-295  
受付時間: 10:00-21:00(月~土) 10:00-17:00(日)

# 2019年度リレー・フォー・ライフ・ジャパン(RFLJ) 「プロジェクト未来」研究助成対象者一覧

## 応募総数86件から19件を採択 2019年度RFLJ「プロジェクト未来」研究助成 決定

リレー・フォー・ライフに寄せられる寄付を基にがん研究を支援する「リレー・フォー・ライフ・ジャパン(RFLJ)プロジェクト未来」の、2019年度の採択者が9月24日に決定した。この助成金は患者や家族、支援者の希望を

現するために、画期的ながんの治療法や患者のQOL改善などを旨とする日本国内の研究を助成するもので、今年で8回目となる。同助成金審査委員会での審査、ならびに日本対がん協会理事会の承認を得て決定した。

応募総数は86件で、I分野(基礎研究・臨床研究)が58件の中から10件、II分野(患者・家族のケアに関する研究)が28件の中から9件、あわせて19件が採択された。採択者と研究テーマ、助成金額は下表のとおり。

### 分野I(基礎研究・臨床研究)

(五十音順、敬称略)

申請者名	所 属	申 請 テ ー マ	助成金額
イチハラ 市原 英基	岡山大学病院 呼吸器・アレルギー内科	EGFR遺伝子変異陽性肺がん分子標的治療におけるtolerant細胞を標的とした根治的新規肺がん治療法の開発	100万円
カトウ 加藤 洋人	東京大学大学院 医学系研究科 衛生学分野	がん浸潤B細胞の個性に着目した新しいがん免疫療法の開発	150万円
キタガワ 北川 マサトシ 雅 敏	浜松医科大学 医学部医学科 分子生物学講座	がん細胞の運命の制御を実行する長鎖ノンコーディングRNAの解析と医学応用	100万円
ソシタ 園 下 マサヒロ 将 大	北海道大学 遺伝子病制御研究所 がん制御学分野	新規臓器がんモデル動物を用いた薬物療法の開発	100万円
タテシ 立石 ケンスケ 健 祐	横浜国立大学大学院 医学研究科脳神経外科学	脳悪性リンパ腫の微小腫瘍環境形成機構の解明と同機序に基づく新規薬物治療の開発	100万円
ハヤカワ 早河 ツバサ 翼	東京大学医学部附属病院 消化器内科	Tgf経路依存性消化管浸潤癌の進展機序解明と治療応用	100万円
フジタ 藤田 ユウ 雄	東京慈恵会医科大学 内科学講座呼吸器内科	免疫チェックポイント阻害剤における新規コンビネーション診断薬の開発	100万円
マエカワ 前川 マサシ 大 志	愛媛大学プロテオサイエンスセンター 細胞増殖腫瘍制御部門	コムギ無細胞タンパク質合成系を利用したHER2陽性乳癌に対する新規分子標的薬の開発	100万円
マサダ 増田 マリ 万 里	国立がん研究センター研究所 細胞情報学分野 連携研究室・増田グループ	骨肉腫患者に新たな治療選択肢を：TNiK阻害剤による骨肉腫分化転換誘導を介した新規治療薬の開発	100万円
ミタテ 見立 エイジ 英 史	長崎大学病院 口腔外科	人工知能(AI)による口腔細胞診の診断システムの開発：AIによる口腔細胞診の診断基準の確立に向けて	100万円

以上10件 合計1050万円

### 分野II(がんの支持療法、社会面に関する研究)

(五十音順、敬称略)

申請者名	所 属	申 請 テ ー マ	助成金額
カミベツ 上別府 キョウ 圭 子	東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻・家族看護学分野	2つの命ー妊娠期がん患者家族の経験と望ましい意思決定支援	50万円
コジマ 小嶋 リベカ	国立がん研究センター中央病院 緩和医療科	未成年の子どもがいる若年がん患者のニーズに沿った支援を行う医療者向け教育プログラムの開発	50万円
シノオカ 品 岡 アキラ 玲	岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 人体構成学	癌治療後リンパ浮腫の画像病期分類とそれに応じた複合的理学療法プロトコール作成ー治療効果を維持したまま患者負担を減らすー	50万円
シマツ 島 津 ユタカ 裕	日本赤十字社和歌山医療センター 血液内科	多発性骨髄腫に対する治療補助システム(アプリケーション)の開発	50万円
タカツ 高 津 ミヅキ 美 月	がん研究会有明病院 臨床遺伝医療部	遺伝性腫瘍診療におけるオンライン相談の普及と病診ネットワークの構築	50万円
ヒラヤマ 平 山 カトシ 貴 敏	国立がん研究センター 中央病院 精神腫瘍科	AYA世代がん患者の交流サロン「AYAひろば」開発	50万円
フジモリ 藤 森 マイ 衣 子	国立がん研究センター 社会と健康研究センター 健康支援研究部	若年がん患者の支援に関するニーズ調査	50万円
ミキ 三 木 いずみ	国立がん研究センター東病院 臨床研究支援部門	SCRUM・Japan研究における患者・市民参加型臨床研究の基盤構築	50万円
モリタ 守 田 リョウ 亮	秋田厚生医療センター 呼吸器内科	医療過疎地域における、病院間での多職種チーム形成によるがん診療ネットワーク構築の研究	50万円

以上9件 合計450万円